異世界に行って勇者にならずに済んだけど・・・・

ゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界に行って勇者にならずに済んだけど・・・・

【Ｎコード】
Ｎ３４０４Ｖ

【作者名】
ゆみ

【あらすじ】
神の手違いで殺され異世界へ・・・・勇者にならずに済んだけど・・・・

くそ神に会った日

俺は海良シンク、ごく普通の社会人だ。

の、はず・・・・

ごく普通の社会人の俺の目の前には神がいる。なぜ・・・・・

「俺が間違って殺したから」

「・・・・・今なんて言った」

「だから俺が間違って殺したんだよ」

コイツ・・・・・

「俺の・・・俺の・・・・」

「俺の？」

「俺の２１年間を返せーーーーー！！！！！」

「落ち着け」

「落ち着いてられるか！！」

「まぁまて、俺だって２１年間の人生を奪ってしまった責任だってある、だから・・・」

「だから・・・？」

「トリップしてもらう！」

「トリップ？」

「そうだ、今までとは違う世界、異世界びトリップだ！」

「別び良いけど、どんな場所なんだ？」

「魔物とか勇者とか魔王とかいる世界だ」

「・・・・・・」

「如何した」

「・・・そんな・・・そんな危ない場所に俺を行かせるのか！？お前はまた俺に死ねと言うのか！？」

「勿論、チート能力をやるさ」

「なんだ、そうだったのか」

「で、何がいい」

「俺が決めてもいいのか？」

「あぁ」

「サンキュ、じゃあ一つ目はＢＬＥＡＣＨの力と覇王色の覇気、身

体能力は無限大、剣の腕もかなり強くして、それと、魔力も無限大に、それと瞬間記憶能力も、一応その世界の魔法は千部使えるようにしておいて」

「わかった」

「一つ聞きたいことがある・・・」

「何だ」

「俺は勇者とかにならないだろうな」

「あぁ、大丈夫だ」

「そうか、よかった」

「ハハハッ、まぁ行って来い」

「あぁ行って来る」

「おう！」

「あっ」

「どうした」

「名前は何て言うんだ」

「カンだ」

「カンか、解ったありがとな」

「おうよ、行って来い」

「あぁ」

扉を開け

新たな世界へ・・・・

シーラス王国一の魔導師に！

扉を開いたさきは・・・野原だった。

「ここか・・・・」

突然紙が落ちてきた。

「ん？」

『よお、今お前がいる場所から少し西へ行くとこの世界の大都市、シーラス王国がある、まずはそこに行ってギルドの登録でもするといいぜ。それと、今のお前の格好じゃこの世界とあわないから、お前の隣に服とフードつきのコートを置いといた、使ってくれフードがついているだろう、それは顔を隠すためだが・・・まぁお前が隠したくなかったら隠さなくても良いけど、俺としては隠してもらいたい。
それと、金はコートの中に入っているから自由に使ってくれ、じゃあな』

「なるほどね・・・取り合えず着替えるか、フードは・・・神が隠しとけって言ってんだし隠しとくか」

着替え終わり・・・・

「さて、ギルドの登録を済ませておくか」

そして、ギルド・・・・

ギギギ・・・

俺が扉を開けた瞬間こちらを見た、そりゃあ顔を隠して入ってくるんだしな、ちなみに俺はコートとかで隠しているけど、髪は黒い長髪だ腰まである髪を束ねている。

早速受け付けの場所へ行った。

「こんにちは、依頼ですか？」

「いや、このギルドに入りたくてな」

「解りました、では属性と魔力量を調べるのでこの水晶玉に手を」

「いや、属性と魔力量はもう知っているから大丈夫だ」

俺は全ての属性を使えるからな。

「そうですか、ではこの紙に名前と自分が使える属性を書いてください」

「・・・・・はい、書き終えた」

「では、これが貴方の会員カードです」

「解った」

「依頼を受けるときはまず、あそこに行って依頼が書いた紙があるので、それをもって此処へ見にきせてください、私に見せた後に行ってきてください」

「解った」

さて、どれにするか・・・おっ、丁度いいのがあったな。

「ではこれを」

「！これですか？」

「あぁ」

「危険ですよ」

「あぁそうだろうな」

俺が見せたのは、黒竜の捕獲何でもこの国の王様が欲しいらしい。けど全員やらない、それは・・・死ぬ可能性があるからと言っていた。

「行ってくる」

そして黒竜のいる場所に着き・・・・

『グォォォォォォーーーーーー！！！！！』

「あれか・・・・さて」

俺は覇王色の覇気を使い気絶させ、引きずりながらギルドへと戻った。

戻る途中に町を通ったが周囲が俺を見ていた、何故？

ギルド・・・・・

ギギギ・・・・

「早かったわね」

「あぁ、外に黒竜を置いてあるから」

「捕獲したのね」

「あぁ」

「解ったわ、早速陛下に伝えないとね」

そして、受付さんが陛下に伝えたらしく、すぐに陛下が来た勿論兵士もだ。

「礼を言う、中々みなが遣らないから困っていた処だった主、名前は何と言う」

「シンクです、陛下に会え光栄です」

「そうか、シンクか、処でシンクのランクはどの位だ」

「Dランクです」

「なにっ！」

ランクはD、C、B、A、S、SS、SSS、SSSSランクの順だ、今の俺は一番したのランクだ。

それで、驚いたんだろう黒竜はSSSSランクがやっとの思い出捕獲できるからだ。

「俺は今さっき登録したばかりで、Dランクなんです」

「そうか、それで・・・・では黒竜を倒したシンクは一揆にSSSSランクだな」

「そうですね」

「「ハハハハハッ」」

「うぬ、実に面白いシンクはこの国最強の魔導師だっ！！！」

「ありがとうございます」

「いいや、シンクよ」

「はい」

「頼みたい事がある」

「はい、なんなりと」

「・・・空へ行って空城から、勇者の剣を取ってきてほしい」

「空へですか・・・」

「あぁ、主なら大丈夫であろう、取ってきたらすぐに城へ来い」

「解りました」

「明日、勇者召喚の儀を行う、明後日までには戻ってきてほしい」

勇者召喚だと！

「・・・解りました、早速行って来ます」

「頼んだぞ」

「はい」

俺は空城へ向かった。

次の日の新聞に・・・・

新聞

昨日××ギルドにフードをかぶった謎の男が入った！その男の名前はシンク、初仕事が、あの黒竜の捕獲

たった数分で捕獲したと言う！依頼した陛下もすぐ行き、大変喜んでた！シンクはたった1日でDランクから最上級のSSSSランクまで上り詰めた！！これを知った陛下は、

『この国最強の魔導師だっ！！！！』

と言い直ぐにシンクはこの国一の魔導師に・・・更にその後シンクに陛下が依頼したという！！シーラス王国一の魔導師は無事に依頼をこなせるか！？

俺がのっているとは知らずに・・・・

魔王と勇者にあってしまった日

先日王に頼まれて空にある空城にいる。えっ、付くのが速いって、それば瞬歩を使ったからだ。

「早速、勇者の剣とやらを取ってくるか」

俺が城に入ろうとすると・・・・

誰かが塞いだ。

「行かせるわけには、行かないな」

「・・・誰だ」

「俺は魔王だ」

「魔王か、まさか魔王直々に此処までくるとは思わなかったな」

「だろうな、本当だったら俺は来ない、けれどお前に興味が沸いてな」

「興味？俺なんかに」

「あぁ、俺には今日召喚される勇者よりお前のほうが強いと思ってしまってな」

「！・・・如何してそう思った」

「俺は魔王だからな」

「そうですか、それで俺の邪魔をするか？」

「いや、お前と会って見たくてな」

「そうか、じゃあ行かせてもらうぜ」

「あぁ、そうだ名は何と言う」

「シンクだ」

「そうか俺はヴィストリア・セーグだ」

「魔王も名前あるのか」

「あぁ、お前達が来るのを楽しみにしている」

ヴィストリアはいなくなっていた。

「さて、行くか」

空城内部・・・・

「これはまた・・・・すごいな」

俺の目の前には剣があった。それも途轍もなく金色に光っていて。

「流石、勇者の剣か・・・・ん？なんだこの剣」

勇者の剣の横にもう一つ剣があった、その剣は銀色に光っていた。

「念のため両方持っていくか」

俺は二つの剣を持って城を出た。

「さて、早くシーラス王国に戻らないとな」

瞬歩でシーラス王国に向かった。

「もう勇者召喚終わっちゃったかな」

そう考えながらシーラス王国に戻るシンクであった・・・・

その頃、シーラス王国

「なにっ！勇者召喚を行うときの魔術師が足りない！？」

「はっ、あと５０人のＳＳＳＳランクの魔術師が必要です」

今、イーラス王国では勇者召喚を行うときの魔術師が足りなく、召喚の儀が遅れられていた。

「シンクはまだ帰ってないし・・・・・」

「っ・・・」

「陛下！！」

「どうした」

「シンク殿がお帰りになられました！！」

「そうか！ではシンクを連れて神殿へ行くぞ！」

王・王子・シンクが神殿へ向かった。

「ここか」

「シンク頼むぞ」

「あぁ」

俺は魔方陣がある場所に向かい、魔方陣に魔力を注いだ。魔方陣が光だした、ついに勇者が召喚される。陛下は関心しているようだ。

『さすがシンク、あと５０人のＳＳＳＳランクの魔導師が必要なのにシンク１人で５０人分の魔導師を埋めるとは・・・やはりシーラス王国一の魔導師だな』

王は関心しているのであった。

「父上のん気に関心していないで、ちゃんとしてください」

「悪い悪い」

「ついに始まりますよ」

「そうだな」

そして、魔方陣から人が現れた。

「なんだ？」

「何処だ此処」

「知るわけないだろう」

周囲が騒ぎ始めた。

「二人・・」

「失敗か」

「そんなわけあるか、シンク殿がいるんだぞ」

「静まれ！！」
王が言った。
「シンクこれは・・・」
「大丈夫です陛下・殿下、これは俺が二人来るようにしました」
「そうか、あとでその理由を聞かせてもらう」
「あぁ」
「勇者様」
王は二人に話しかけた。
「私はこの国の王、カリベル・ラース・シーラスです」
「私はその息子この国の第一王子のハリベル・ガーズ・シーラスです」
「お二方、お名前は？」
「真情　光輝です」
「神山　直哉です」
「シンジョウ様とカミヤマ様ですか」
「いえ、それは・・・」

「陛下、きっとそれはお名前ではないでしょう、きっとコウキ様とナオヤ様でしょう」

シンクが言った。

「そうなのですか」

「はい」

「では、コウキ様・ナオヤ様、此方へ。此処が何処なのか教えましょう」

「「はい」」

「陛下、では俺とは後ほど」

「シンクも来ないのか」

「俺は少し用事があるんだ」

「そうか、解った」

俺は瞬歩でその場をたった。

〜光輝視点〜

俺らはいつの間にか変な場所にいた。国王やら王子やら魔導師やら異世界なようだ。直哉はいつもどうり冷静・・・なんでだよ！

王様が名前を聞いてくるのだ、

「真情　光輝です」

「神山　直哉です」

俺につずいて直哉が言った。

「シンジョウ様とカミヤマ様ですか」

王様がなんでか苗字を言ってきた。

直哉が何かに築いたらしく

「いえ、それは・・・」

その時・・・

「陛下、きっとそれはお名前ではないでしょう、きっと、コウキ様とナオヤ様でしょう」

黒いコートを着てフードで顔を隠していた人がいた、誰？

「そうなのですか」

「はい」

直哉が言った、だから何でそんなに冷静なんだよ！！？？

「コウキ様・ナオヤ様、此方へ。此処が何処なのか教えましょう」

なんか直哉が行くきみたいだったので、

「「はい」」

返事をした。

その時、またあの黒いフードで顔を隠した男が・・・だからなんだよこの人！？

「では、陛下俺とは後ほど」

謎の男が話しかけていた。

「シンクも来ないのか」

シンクって言うのか。

「俺は少し用事があるんだ」

この人王様にむかって・・・さっきとは別人！

「そうか、解った」

いつのまにか、シンクって言う人がいなかった。

本当なに！あの人！

直哉も気になったらしく、直哉が王様に聞いた。

「彼はシンク、この国一の魔導師です。コウキ様とナオヤ様を召喚した一人です、お二方を召喚するのに魔導師が足りなく困っていたんです。シンクはその頃私が依頼し、いなくて大ピンチな時丁度その頃かえってきて、あと５０人必要だったのが、シンク１人で５０人分の魔力を埋め、無事にお二方を召喚したのです」

なんか、すげぇんだなシンクって人。

「カリベルさん」

直哉が王様に話しかけた、勇気あんな。

「なんでしょう」

「シンク殿はなぜ顔を隠しているんですか？」

おっ！それ俺も聞きたい！

「それは私も知らないんです。誰一人見たことがないんです」

マジっ！

「王であるカリベルさんに対してもあまり敬語を使ってなかったようですが・・・」

そういえば・・・

「私が許可したんです、つきました。この部屋へ」

その部屋はとても豪華な部屋だった、そこにはシンクっていうひともいた。

用事があったんじゃないの？

そう思いながら部屋に入った。

勇者にどう思われてんだよ俺

俺はさっきまで、依頼をこなしてた。何とか速く終わらせようとし急いだ、何故かってそれは少し勇者達の事が気になったからだ。依頼を終わらせ城に戻り侍女に

「あの部屋でお待ちしていて下さい」

と言われたので、のん気に待っていた。数分たつと陛下と勇者達が来た。

「何故シンクが、用事は？」

「あぁ、直ぐに終わらせて来た」

「そうか」

勇者達が俺を見ている・・・念のため自己紹介でもしておくか。

「シンクです、魔導師を遣っております。宜しくお願いします」

「あっ、真情　直哉です」

「直哉、こっちでは・・・」

「そっか」

「えっと、コウキ・シンジョウです」

「ナオヤ・カミヤマです」

「宜しくお願いします」

「挨拶も終わったことですし、此方へ」

殿下、いつの間に。

俺、陛下、殿下、コウキ（様）、ナオヤ（様）が椅子に座った。

「ではまず何から聞きたいですか？」

「では、なぜ俺らが呼ばれたかを・・」

ナオヤ（様）が質問してきたか。

「この世界を魔王が襲ってくるということが解ったのです、その前触れか魔物達が我々人間を襲ってくるのです。魔王を倒すには勇者様が必要なのです」

「それで、俺達を召喚したと・・・」

こんどは、コウキ（様）か。

「はい」

「もう一つ、何故俺達二人のどちらが勇者なのですか」

鋭いなナオヤ（様）

「それは私にも知りません」

「「えっ！」」

「本当でしたら、勇者1人を召喚するはずだったのですが、此方にいるシンクが二人くるように召喚したと言うのです。シンク理由を」

やっとか・・・

「異世界から1人召喚され同じ世界の人間がいなにのはとても不安になるでしょう、そうなれば魔王を倒す前に勇者が精神疲労で倒れてしまう、その可能性もあると思い勇者と賢者を召喚しました」

「「成る程・・」」

「流石だシンク」

「いえ」

まっ、これはあのクソ神から言われたんでね。

『お願いね～』

あのやろぉ～

「シンク殿」

「シンクで好いですよ、何ですか」

「それで、俺と直哉のどっちが勇者なんだ？」

「そうです」

「解りません」

「「は？」」

勇者２人に不思議がられる俺でした。

つかどう思われてんだ俺。

印

「解らないって・・・」

「如何するんだっ！」

お～陛下達焦ってるな～

「焦るな、大丈夫だ」

俺は自信満々に言った。

「シンク・・・」

・・・ヤバイ、陛下が涙目だ！

勇者・賢者は（どっちか解んないけど）陛下を見て驚いているよ。

「大丈夫だ、明日になったら解る」

「「「「え？」」」」

『何で？』って顔しているな。

「シンクさん如何してですか？」

「逸れはですね、明日に為ればお二方のどちらかに金色の印が右腕に表れます、賢者様は銀色の印が左腕に表れます、それとナオヤ様さん付けは止めてください」

「「「「・・・・・・・」」」」

あれ・・・・

何か言っちゃいけなかったりする？

「・・・・シンク、本当なのか？」

「あぁ」

何たって、あのクソ神が言ったんだからな。

「と言うことで行きましょうか、コウキ様ナオヤ様」

「行くって何処へ・・・」

おいおい陛下二人に言ってないのか？

「陛下・・・・殿下・・・・」

言った瞬間、二人とも焦っているな。

「今言うところだったんだ」

「そうだシンク」

誤魔化したな。

「はぁ」

「何処かへ行くんですか？」

「そうですよナオヤ様」

「何処へ？」

「広間です、陛下のご家族とお二方が会うんですよ」

「「・・・・・・はぁーーーー！」」

やっぱ驚くよな、うん解るぞ。

「ですので行きましょう」

そして広間へ行く俺達でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3404v/

異世界に行って勇者にならずに済んだけど・・・・

2011年10月9日05時08分発行